

## 旋律創作（1年）コードネームをもとに対旋律を創作しよう（6時間扱い）

（教科書 p.10-11 アニー・ローリー）

### <概要>

○歌1・歌2・R の3つのパートが教科書に掲載されているが、そのRパートの前半8小節を教科書に掲載されているコードネームをもとに、創作する学習。

○1年生の教科書 p.11 に掲載されている、主要三和音（I IV V V7 の和音記号 含む）の学習が、中学校3年間で不十分と感じているので、コードネームの指導と関連させて指導する。

### <1時間目>（時間の取り扱いは、目安。他の表現教材と平行して取り組むことが多い）

歌1（主旋律）をリコーダーで演奏する。

歌2については、今回の創作の題材の中では、扱わない。

R（対旋律）をリコーダーで演奏する。

※ 本校ではソプラノリコーダーを用いているが、教科書にあるハ長調の楽譜は、音域的にアルトリコーダーの方が、美しく響くと思われる。

### <2時間目>

パワーポイントの「スライド1～7」を用いて、説明する。

ここが知識・技能（創作）の指導の基本となる時間

この内容の指導を、生徒がわかりやすく、かつ面白く展開することができると、次時の創作がスムーズにいく。

「スライド1～7」まで（内容：コードネームとは何か。）説明した段階で、ワークシート「コードネームをもとに、対旋律を創作しよう」に取り組みせると、実際は教科書に書かれている事項を、うつすだけの作業なので、多くの生徒が苦勞せず記入することができる。

説明が長くなると、生徒も疲れるので、前時の復習として、歌1（主旋律）やR（対旋律）を、教科書の楽譜通り、演奏する時間もしっかり取る。

### <3時間目>

パワーポイントの「スライド8～14」を用いて、対旋律創作のルール（この題材の、今回に限ったルール）を説明する。

創作の題材では、このルール設定が大変重要である。

自由度を広げると、初心者には難しい活動となるので、1年生の最初は、制限が厳しいルールの方がよい。そうすると、力のある生徒には、そのルールを破って、自由に創りたい（非和音を使いたい、リズムをかえたい、音域を広げたいなど）と、より応用することへの意欲付けになる。

ルールは スライド 9-11 に記載してある 4 つである。

ルール 1 4分の4拍子の足し算をしっかりと

苦手な生徒には、教科書の R と全く同じリズムで、音だけ変えてみようとアドバイスすると、うまくいく。

あるいは、全部の小節を二分音符だけで創ろう、という声かけもよい。

ルール 2 コードの構成音だけ使う

G7はGとの違いを目立たせるために セブンスの音を入れるように指導する。

つまり F の音を指定することになるので、自由度がせばまり、生徒は楽になる。

ルール 3 分数コードが出てくるが C/G は=C と考える。

できれば、分数コードの説明はしたくないのだが、教科書に使われているので、仕方なく扱う。

(教科書 p.65 に分数コードの説明がある。p.65 のコードネーム表は 2 時間目のコードの説明やワークシート記入の時から、度々開かせる。教科書 p.11 にも参照するよう示されている。ギターへの憧れからか、コードネームに興味を示す生徒は多い。)

ルール 4 1小節にコードネームが2つ有るときの扱い (2拍ずつ)

この説明は簡単だが、いざ創作させると付点二分音符と四分音符で創作した場合など、いろいろ微妙な作品がでてくる。個別の指導のときに声かけはするが、コードネームが2つ入っているこの小節については、多少、非和声音が混じってもよいとし、厳密には扱わない。

○ルールの指導を終えたら、前半 8 小節の対旋律の創作に入る。

五線譜初心者には、五線で作成する前に、ドレミを五線の下にカタカナで書いて、試行錯誤し、ある程度できてから音符に書くよう指導する。

この題材に入る以前に、「楽しいリズム曲をつくろう」の学習を終えていると、4分の4拍子の足し算の指導を省略できる。

音符の足し算ができないと、創作以前の、記譜指導で時間がかかってしまう。

できた人から、教師のところにもってくる。

コードの構成音のみ使うと制限しているので、非和声音を使っていたり、音符の足し算ができていない生徒は、チェックして戻す。音符のたま(符頭)が大きすぎて、音高が曖昧な生徒も書き直させる。楽譜が正しくかけていた生徒は、そのままピアノの横で、教師の伴奏にあわせて、演奏させ、吹けたら、ワークシートにスタンプを推す。(他の生徒は教室内で創作しているので、うるさい中での活動となる。あまり緊張せずに生徒は演奏できる。)

この時間のうちに、スタンプを押せる生徒は、おそらく数名である。

<4 時間目>

創作→演奏→スタンプの中心となる時間

スライド12～14を使って、旋律創作の工夫点について説明する。

工夫点は2つ

①リコーダーにふさわしい音域について

対旋律のどのように響かせたいのか？（教師が例として、いくつの対旋律を創って吹くとよい）

- ・主旋律を補って、支える感じ（主旋律より低い音域で）
- ・主旋律とは、対照的に、旋律を歌うような感じで目立たせたい（主旋律より高い音域で）
- ・どんな管楽器でも最低音は響きにくいものである。ソプラノリコーダーの最低音はCなので、ハ長調の曲ではよく出てくるが、楽器としては響きにくい音である。最低音のCをさけて創作する可能性なども示唆する。

②旋律の方向性

主旋律と同じ方向だと寄りそう感じであるとか、対照的だと音楽に動きがでるとか・・・。

イメージは生徒それぞれ違ってよい。

工夫の観点を指導し、前時にスタンプを押してもらった生徒も、旋律に工夫を加えさせる。  
この工夫点が発表会での説明につながる。

スライド15～20

時数に余裕がある時、もしくは、生徒の理解がはやい時に使ったこともあるが、  
基本は15以下のスライドは使用しない。

<5 時間目> ペア練習+「対旋律づくりの工夫点」のワークシートを記入+相互評価表を配付して説明  
座席の隣同士で、主旋律と対旋律で二重奏をする。

教科書対応のCDのカラピアノは、2番まで伴奏が収録されている。

2人ペアで1番が主旋律の人は、2番は自分の創った対旋律を演奏する。

1番で対旋律を吹いた人は、2番は主旋律を演奏する。

対旋律の前半は創作したオリジナル、後半8小節は、教科書のままで演奏する。

ペア練習をする時間も平行して創作が完成していない生徒の演奏を聴き、スタンプを押し続ける。  
次時が発表会なので、授業の最後に楽譜を回収する。

この時間で、スタンプを押せない生徒は、例年2～3名である。

授業時間外に、休み時間などにフォローして、なんとか完成させ、楽譜を回収する。

教科書のRの旋律とほぼ同じで、ほんの一部だけ音高を変えただけでもOK。

## <6 時間目> 発表会

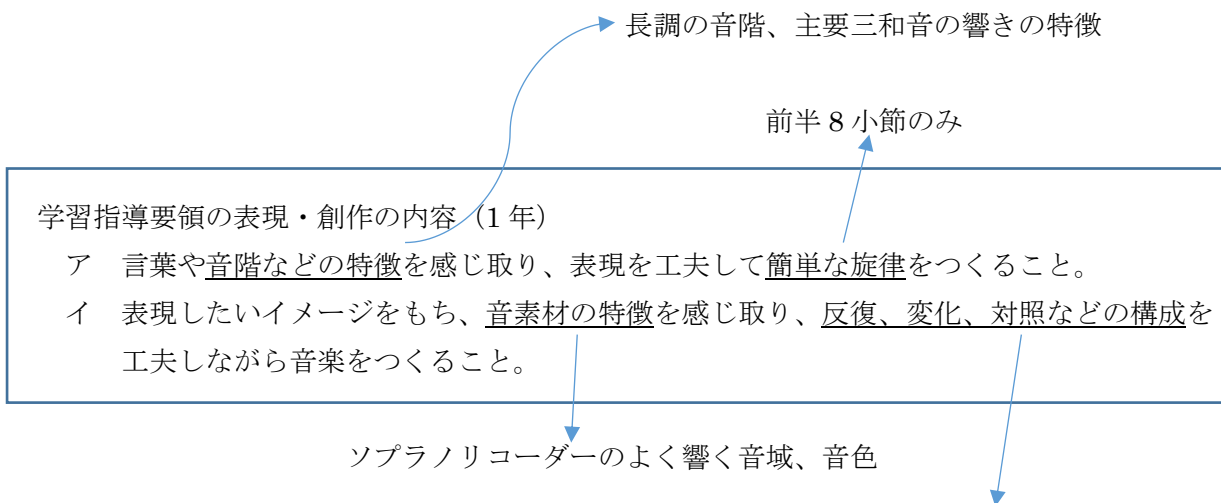
伴奏 CD を流して、ペアで発表させる。

一般的なリコーダーの器楽の発表会の時も、伴奏は CD や教師の伴奏を録音したものを使うことが多い。CD だと途中で止まらないので、苦手な生徒も吹けるところだけ吹いたり、たとえ全く吹けなくても、CD が終わることで発表をおえられるという、安心感がうまれる。生の伴奏だと、伴奏している側（教員）が、できない生徒に対して、テンポを遅くしてあげたり、待ってあげたりすると、そのことでかえって目立ってしまって、劣等感を増幅させてしまうような気がする。

発表する前に、「対旋律づくりの工夫点」のワークシートを読み上げる形で、説明させる。前時に楽譜を回収して、PDF 化し、テレビに前半の楽譜を写して発表会。当日、生徒は原版をみて演奏するが、工夫点の説明で、テレビ画像がないと説明をきいている生徒が理解できない。また、時には教師が口をはさんで、工夫点をかみくだいて説明したり、補足したりする時も、楽譜が共有できると話しやすい。

相互評価表を記入しつつ、生徒は鑑賞する。教師も同じ評価用紙をつかって、評定資料とする。生徒が記入したものは、演奏者の評価には反映しないが、鑑賞者の鑑賞の評価とすると伝えている。実際には、鑑賞の評定資料とはしない。（評価資料と評定資料の違い）

表現領域のどの発表会においても、相互評価表は前時に配付し、評価の観点を説明している。評価の観点を知ることで、生徒は題材のポイントを深く理解し、仕上げの学習をすることができる。



二部形式という言葉はまだ指導しないが、4 小節の小楽節が 2 回繰り返されて、8 小節の大楽節になるという構成は、体験的に理解させる。

1 段目（a）の最後は、続く感じ、2 段目（a'）の最後は、終わる感じ。

a と a' で主旋律が反復するところで、対旋律も同じように反復させるのもよいし、あえて変化させるのもよいことを指導する。

# コードネームをもとに、対旋律を創作しよう

年 組 番 名前

---

○対旋律とは？

旋律＝

ふりがな

英語

対旋律＝

イタリア語

英語

○教科書を見て、コードネームについて調べよう。

コードネームとは… ( ) の 名前

読み方

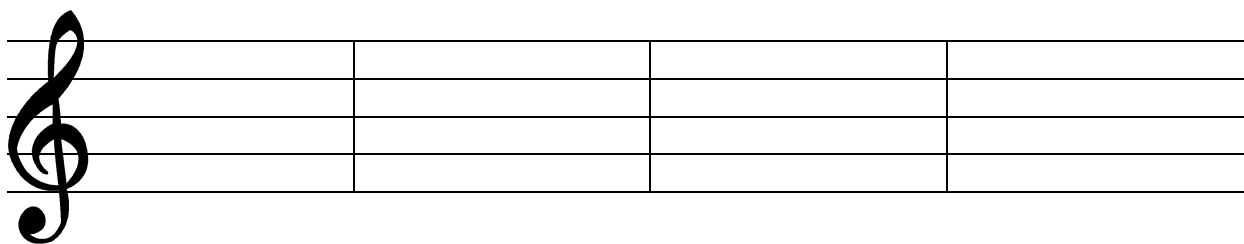
C＝

Cm＝

C7＝

○この曲に使われているコードの構成音を調べ、全音符で記入しよう。また、和音記号で表してみよう。

<ハ長調>



C

F

G

G7

和音記号

構成音の階名（ドレミで・・・）

( ) ( ) ( ) ( )

# アニー・ローリー

年 組 番 氏名

スコット夫人 作曲  
和田 崇 編曲

歌1

R

Chords: C, F, V, C, G

The first system of music is in 4/4 time. The vocal line (top staff) starts with a C chord, followed by F, V, C, and G. The piano accompaniment (bottom staff) is mostly empty, with a few notes in the first measure.

5

Chords: C, F, V, C/G, G7, C, V

The second system continues the melody from measure 5. The vocal line has notes for C, F, V, C/G, G7, C, and V. The piano accompaniment has some notes in the first measure.

9

Chords: G, C, V, Am, Dm, E, E7, V

The third system continues the melody from measure 9. The vocal line has notes for G, C, V, Am, Dm, E, E7, and V. The piano accompaniment has a rhythmic pattern of eighth notes.

13

Chords: Am, F, C, V, C/G, G7, C

The fourth system continues the melody from measure 13. The vocal line has notes for Am, F, C, V, C/G, G7, and C. The piano accompaniment has a rhythmic pattern of eighth notes.

## 対旋律づくりの工夫点！（発表会で演奏前に読み上げます）

組 番 氏名 \_\_\_\_\_

創作のポイント	工夫点
主旋律とのかかわりを生かして	キーワード： <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">旋律の方向</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">旋律のリズム</span>
Sリコーダーの特徴を生かして	キーワード： <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">Sリコーダーの音色</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">Sリコーダーの音域</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">Sリコーダーの運指</span>

< 創作のポイント >

- ① 4分の4拍子の記譜を正確にする。 → 旋律のリズム
- ② コードの構成音をもとに創作する。 → コードの構成音
- ③ 主旋律とのかかわりを生かす。 → 旋律の方向
- ④ Sリコーダーの特徴を生かす。 → Sリコーダーの音色 Sリコーダーの音域

## 対旋律づくりの工夫点！（発表会で演奏前に読み上げます）

組 番 氏名 \_\_\_\_\_

創作のポイント	工夫点
主旋律とのかかわりを生かして	キーワード： <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">旋律の方向</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">旋律のリズム</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">コードの構成音</span>
Sリコーダーの特徴を生かして	キーワード： <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">Sリコーダーの音色</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">Sリコーダーの音域</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">Sリコーダーの運指</span>

< 創作のポイント >

- ① 4分の4拍子の記譜を正確にする。 → 旋律のリズム
- ② コードの構成音をもとに創作する。 → コードの構成音
- ③ 主旋律とのかかわりを生かす。 → 旋律の方向
- ④ Sリコーダーの特徴を生かす。 → Sリコーダーの音色 Sリコーダーの音域

# アニメ・ローリー 二重奏発表会

年 組 番 名前

番号	氏 名	関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫		音楽表現の技能		鑑賞の能力	A = 2 点 B = 1 点 合計 = 10 点
		姿勢 (ABC)	対旋律の工夫 (ABC)	工夫の説明 (ABC)	主旋律 (ABC)	対旋律 (ABC)	聴く態度 (-1)	
1101								
1102								
1103								
1104								
1105								
1106								
1107								
1108								
1109								
1110								
1111								
1112								
1113								
1114								
1115								
1116								
1117								
1118								
1119								
1120								
1121								
1122								
1123								
1124								
1125								
1126								
1127								
1128								
1129								
1130								
1131								
1132								
1133								
1134								